ベンジャミン・ブリテンの作品

20 世紀イギリス最高の作曲家といっても過言ではないベンジャミン・ブリテン（1913-76）。彼は第二次世界大戦前後の作曲界の前衛的潮流を見据えつつも、そこからは距離を置き、実に多様で高度な技法によって様々な音楽を書き続けた。

「チェロと管弦楽のための交響曲」は、実質的には「チェロ協奏曲」。1960 年に出会ったチェロの巨匠ムスティスラフ・ロストロポーヴィチと親交を深めたブリテンは 1963 年、ロストロポーヴィチのヴィルトゥオーソを念頭に本作を作曲し、翌年、初演された。全 4 楽章構成で、ブリテンの盟友ショスタコーヴィチ（この 2 人もまた、ロストロポーヴィチのおかげで知己を得た）を彷彿とさせるストイックさを持つ。第 2 楽章には「inquieto」（不安げな／落ち着かない）と記されたプレストが置かれ、第 3 楽章後半で深い静けさをもった独奏カデンツァが奏されて、休みなくフィナーレへと続く構成などは、ショスタコーヴィチのヴァイオリン協奏曲第 1 番を想わせる。高度な技巧を要するチェロが、オーケストラの弦楽・管楽セクションと全編にわたってかけ合いを見せる。

激しいティンパニの強打から始まる**「シンフォニア・ダ・レクイエム」**は 1939 年、ブリテンが 26 歳の時の作品。日本政府は 1940 年の皇紀 2600 年の記念のため、世界の作曲家たちに奉祝曲を依頼し、当時アメリカにいたブリテンにも打診が届いた。彼はこの「シンフォニア・ダ・レクイエム」を作曲して日本へと送ったが、「なぜ国の祝いに、よりによって“レクイエム”なのだ？　皇室に対する侮辱だ」と政府から抗議され、結局、式典では演奏されなかった（初演は翌 1941 年、バルビローリ指揮ニューヨーク・フィルの定期公演）。この曲はカトリックのミサ曲の一つである「レクイエム（死者のための鎮魂曲）」から、「ラクリモーザ（涙の日）」「ディエス・イレ（怒りの日）」「レクイエム・エテルナム（主よ、永遠の安息を）」の 3 つが管弦楽のみの音楽として演奏される。ブリテンの特徴をよく示す、内省的な祈りに充ちた、厳しく凝縮された一曲である。

「青少年のための管弦楽入門」は、タイトルにある通り、教育目的でイギリス政府が製作した映画『管弦楽の楽器』のための音楽として 1945 年に作曲。冒頭、17 世紀のイギリスを代表する作曲家ヘンリー・パーセルによる主題をオーケストラが総奏（トゥッティ）する。楽曲の意図として、オーケストラを構成する様々な楽器を紹介するよう作られているため、解説を交えながら各楽器が個別に、または管・弦・打楽器といったセクションごとに演奏を披露していく。そして再び、オーケストラ全体がパーセルの主題を（楽器が紹介された順に登場しながら）フーガで演奏し、その響きが徐々に膨れ上がって高度な二重フーガとなり、最後はトゥッティで壮大なクライマックスを築く。